

長岡京跡右京第 1180 次・伊賀寺遺跡調査 現地説明会資料

遺 跡 名 長岡京跡右京八条三坊十六町（第 2 図）、伊賀寺遺跡

所 在 地 長岡京市下海印寺下内田ほか

調査期間 2018 年 10 月 29 日～2019 年 10 月（予定）

調査面積 約 4,000 m²

はじめに

今回の調査は、病院建設工事に伴う事前の発掘調査として実施しました。調査地は、阪急京都線の西山天王山駅より北西約 250mにあります。立地は、地形分類の低位段丘Ⅱにあり、地表面標高は約 29m、調査区の中心座標は、旧国土座標第Ⅵ系のおよそ X＝－120,550、Y＝－28,400 にあります。調査着手時点の現状は、東西に長い短冊形条里地割で、北から南に棚田状に下る田畑でした。

周辺部での調査状況（第 3 図）

当調査対象地の北東約 100mで、長岡京跡右京第 70 次調査が実施され、縄文時代草創期有茎尖頭器の出土や、飛鳥時代の竪穴建物群、鎌倉時代の掘立柱建物群の検出などがありました。

南接する京都縦貫道関係では、京都府埋蔵文化財調査研究センターにより、長岡京跡右京第 799・840・927・943・947・988 次調査が実施され、東接する府道 10 号線関係でも、同右京第 910・941 次調査が実施されています。これらの調査で、縄文時代草創期の有茎尖頭器の出土、同中期・後期の竪穴建物の検出、晩期の土器の出土、古墳～飛鳥時代の竪穴建物や掘立柱建物の検出、奈良時代の掘立柱建物の検出、長岡京期の掘立柱建物や溝などの検出がありました。

長岡京市埋蔵文化財センターは、東接する京都府道 10 号線の東側で、長岡京跡右京第 1073 次調査を実施し、縄文時代中期の竪穴建物群の検出、同晩期の土器埋設遺構の検出、古墳時代～飛鳥時代の竪穴建物や掘立柱建物群の検出、奈良時代の掘立柱建物の検出などがありました。

また、長岡京市教育委員会は、この遺跡の範囲確認のため、当対象地を中心に、長岡京跡右京第 975・1016・1033・1078・1097 次調査を実施し、縄文時代後期の玉作関係の遺物、奈良～飛鳥時代の掘立柱建物群や奈良時代の地鎮遺構と思われるもの、縄文時代中期の掘り込みなどを検出しました。

このような周辺部の調査成果から、当調査地は奈良時代～長岡京期をはじめ、縄文時代・古墳時代・飛鳥時代などの伊賀寺集落遺跡の広がりを検討する重要な地点にあります。

基本的な土層堆積

基本層序は、厚さ約 15～20 cm の旧水田耕作土があり、その下に、淡い黄色系土層の中世遺物包含層があります。北西部の 1 段高い部分には、黄色系土層の平安時代遺物包含層があります。これらの土層を除去した面から、奈良時代～長岡京期と思われる遺構群や飛鳥時代の一部の遺構群が検出されました。この遺構群の基盤土層になっていた褐色～黒褐色系土層には、旧石器時代から長岡京期の遺物が包含されていました。この遺物包含層を除去した面から、縄文時代から飛鳥時代の遺構が検出されました。

検出遺構（第 4 図）

主な検出遺構には、（1）奈良時代～長岡京期にかけての建物 4 棟・柵 3 列・柱列 1 列・池状遺構 1 基・井戸 1 基・掘り込み 5 基・溝 6 条、（2）飛鳥時代の建物 10 棟、（3）古墳時代の建物 6 棟・井戸 2 基・掘り込み 5 基・土器集積遺構 1 基、（4）縄文時代の建物 9 棟や掘り込みなどがあります。

（1）奈良時代～長岡京期にかけての遺構（第 5・8 図）

世界測地系南北方向より、北で西に約 8° 振れた方向を基準に、整然と配置されています。

建物 1 ほぼ東西方向に棟をもつ、梁行約 13.2m、桁行約 15m の掘立柱建物です。身舎は、梁行 2 間、桁行 5 間で、柱間は 10 尺等間です。身舎との距離 12 尺で南北両面に庇があります。柱痕から、直径約 30cm の柱が使われたと思われます。

建物 2 ほぼ南北方向に棟をもつ、梁行約 9.6m、桁行約 15m の掘立柱建物です。身舎は、梁行 2 間、桁行 5 間で、柱間は 10 尺等間です。身舎との距離 12 尺で東に庇があります。柱痕から、直径約 25cm の柱が使われたと思われます。

建物 3 ほぼ南北方向に棟をもつ、梁行約 11.4m、桁行約 24.3m の掘立柱建物です。身舎は、梁行 2 間、桁行 9 間で、柱間は 9 尺等間です。身舎との距離 10 尺で東西両面に庇があります。また、身舎内の南半部に、約 5 尺等間で甕据え付け穴と思われる 3 列の円形の浅い掘り込みが並んでいます。ほかに、この掘り込み群の北辺の北側に、須恵器壺 A 蓋などが出土した掘り込みがあります。この建物の南東部には、柱根が残るものもあり、柱痕の土層観察と合せて、身舎部分は直径約 30cm、底部分は直径約 25cm の柱が使われたと考えられます。柱根の残存する柱間の計測により、1 尺は約 29.4cm 前後と考えられます。

建物 4 竪穴建物のような遺構です。約 3 m 四方を隅円方形に掘りくぼめたもので、四隅に直径約 40 cm の柱穴があります。掘りくぼめられた床面の中央部に馬蹄形の黄色系粘質土が敷かれ、その北半部中央が焼けて橙色に変色しています。出土遺物には、土師器長胴甕が数個体ありましたが、供膳形態や須恵器はごく少量しか出土しませんでした。類似する遺構は、長岡京跡右京第 941 次調査（京都府埋蔵文化財調査研究センター調査の当調査地に東接する京都府道 10 号線で実施された当遺構検出位置から南東約 125m地点）からも検出されています。当遺構の性格・用途は不明です。

柵 1・2 柱穴がほぼ南北方向に直線的に並ぶ柱列です。柱間は9尺等間で、柵1は池状遺構1の南東部と重複しています。柵と池状遺構との前後関係の有無は不明です。柵1は7間（約18.9m）まで検出しました。柵2は4間（約10.8m）まで検出しました。

柵 3 ほぼ東西方向に3基の柱穴が並ぶ長さ約5.4mの柱列です。柱間は9尺等間で、2間で完結します。柱痕から、直径約30cmの柱が使われたと考えられます。この柱列の中央柱穴が建物1の中軸線上にあることと、柱列1の柱間が長い部分との位置関係から、目隠し塀（蕃塀）の可能性が指摘されています。

柱列 1 柱列1は、溝2に並行して曲がります。ほぼ東西方向に約14.7m、その東端で南に5.4m曲がることまで検出しました。建物になるか、柵（囲繞施設）になるかは不明です。建物1の中軸線が通る部分の柱間は13尺で、ほかの柱間は、東西、南北とも1間9尺になっています。柱間13尺の部分は、出入口の門があったと考えられます。柱根が残る柱穴があり、柱痕観察と合せて、直径約30cmの柱が使われたと考えられます。

掘り込み 1 東西方向の溝状の掘り込みです。幅が約1.2mの東西方向の掘り込みで、15cm前後の垂角礫が肩部に集積した部分がありました。

井戸 1 井戸1は、建物1の南庇の南西隅から1間目の柱穴に接して検出しました。掘削時期は、建物1より古いのですが、出土遺物の内容に大差はありません。

溝 1～5 溝1～5は、いずれも、何らかの区画溝の可能性がありま

溝 6 溝状に瓦片が集積した遺構で、建物3の東辺部に直交方向に検出しました。性格は不明です。

掘り込み 2～5 掘り込み2～5の内、掘り込み2は、建物1の北西隅底柱穴と重なり、当掘り込みの方が古い

池状遺構 1 柵1と柱列1に囲まれた範囲の南西隅で検出された池状に掘り込まれた遺構です。南北約12m、東西約8mの不整形な掘り込みで、北半部が1段深くなっています。

（2）飛鳥時代の遺構（第6図）

世界測地系の南北方向より、およそ30°西に向き、北西側の一辺に造り付けカマドをもつ堅穴建物3棟と、30°～50°西に向く掘立柱建物6棟の建物群です。

建物 6 およそ2.7m四方の梁行2間、桁行2間と思われる掘立柱建物です。他の飛鳥時代と思われる遺構群より振れ角が大きく、北で約50°西に向いています。

建物 7 梁行2間（約3.6m）、桁行4間（約8.1m）の掘立柱建物です。梁行の柱間は、約1.8m等間ですが、桁行の柱間は約1.5～2.5mで、南西部が広く、北東部が狭い配置で、不均等です。梁の方向が、北で約30°西に向いています。

建物 8 梁行3間（約4.2m）、桁行4間（約6.6m）の掘立柱建物です。梁行の柱間は、両側が約1.5m、中央が約1.2で、中央の柱間が狭くなっています。桁行の柱間は、約1.2～2.0mと不揃い

建物 9 梁行2間（約3.6m）、桁行3間（約6.3m）の掘立柱建物です。梁行の柱間は約1.8m等間、桁行の柱間は約2.1m等間に配置されています。桁の方向は、北で約30°西に向いています。

建物 10 梁行2間（約3.9m）、桁行3間（約6.3m）の掘立柱建物です。梁行の柱間は約1.95m等間で、桁行は約2.1m等間に配置されています。桁の方向は、北で約40°西に向いています。

建物 11 梁行1間（約3.6m）、桁行は4間以上（7.5m以上）の掘立柱建物です。桁行の柱間は1.8～2m程度で、不均等です。梁行方向は、北で約42°西に向いています。

建物 12 一辺が、北で約30°西に向く、隅丸長方形の堅穴建物です。北西－南東方向が約4.9m、北東－南西方向が約6.2mあり、北西辺のほぼ中央部にカマドを造りつけています。

建物 13 一辺が、北で約30°西に向く、隅丸長方形の堅穴建物です。北西－南東方向が約5.2m、北東－南西方向が5.8m以上あり、北西辺のほぼ中央部にカマドを造りつけています。カマドには、石を立てて支脚にしています。カマドの北東側に、飛鳥時代の土師器杯1個体が置かれていました。

建物 18 一辺が、北で約30°西に向く、隅丸方形と思われる堅穴建物です。北西－南東方向が約5.8m、北東－南西方向が5.3m以上あり、北西辺の中央位置より北東側にカマドを造りつけています。カマドには、石を立てて支脚にしています。カマドの内側や周辺には、土師器甕が散乱していました。北隅部分に、隅丸長方形の掘り込みがあります。出土土器に6世紀の須恵器片があり、古墳時代にさかのぼる可能性もあります。

（3）古墳時代の遺構（第6図）

堅穴建物5棟や井戸状遺構2基のほか、掘り込み5基、土器集積遺構1基などがあります。堅穴建物群は、世界測地系の南北方向より40°以上西に向き、6世紀前半から中葉の土器が出土したものがあ

建物 14 一辺が、北で約45°西に向く、隅丸長方形の堅穴建物です。北西－南東方向が約4.3m、北東－南西方向が5.8m以上あり、北東－南西方向が長くなっています。

建物 15 一辺が、北で約65°西に向く、隅丸長方形の堅穴建物です。北西－南東方向が約4.4m、北東－南西方向が約3.2mで、北西－南東方向が長くなっています。北東側のほぼ中央部分に造り付けカマドがあった可能性があり、焼土面が一部に残っていました。

建物 16 一辺が、北で約50°西に向く、隅丸方形の堅穴建物です。北西－南東方向が約5.3m、北東－南西方向が約5.4mで、ほぼ四角くなっています。北東側のほぼ中央部分に造り付けカマドがあった可能性があり、土師器の高杯が倒立して置かれたいたり、その周辺部に粒状になった焼土や土師器の甕の破片が散乱していました。粒状になった焼土は、北東部に広く散乱し、また南西部にも粒状になった焼土が集中する部分がありました。

建物 17 一辺が、北で約40°西に向く、隅丸方形の堅穴建物です。北西－南東方向が約5m、

北東－南西方向が約 5.2mで、ほぼ四角くなっています。北東側のほぼ中央部分に造り付けカマドがあった可能性があり、焼土面が一部に残り、その周辺部に、土師器の甕の破片が散乱していました。また、カマド内部から、粒状になった焼土とともに、動物の骨と思われる焼骨細片も出土しました。

建物 19 一辺が、北で約 70° 西に向く、隅丸方形の竪穴建物です。北西－南東方向が約 5.1 m、北東－南西方向が約 5 mで、ほぼ四角くなっています。北東側のほぼ中央部分に造り付けカマドがあった可能性があり、土師器の甕の破片が散乱していました。

建物 20 一辺が、北で約 70° 西に向く、隅丸方形の竪穴建物です。北東－南西方向の東辺を約 4 m確認しましたが、南西隅部分だけを検出したもので、規模は不明です。南西隅部から、土師器の甕が出土しました。

建物 21 一辺が、北で約 30° 西に向く、隅丸方形の竪穴建物です。6 世紀前半から中ごろの須恵器片が出土しましたが、建物の方位から、飛鳥時代に下る可能性があります。

掘り込み 6 一辺が、北で約 70° 西に向く、竪穴建物状に掘りくぼめられた遺構です。北西－南東方向が 6 m以上で、北東－南西方向が約 9.5mある隅丸長方形の形をしています。いくつかの掘り込み、または竪穴建物が重複している可能性があります。

掘り込み 7～10 須恵器甕破片などがまとまって出土した掘り込み群です。

井戸 2・3 直径約 1.5m、深さ約 2 mの円形掘り込みです。井戸 2 の底近くからは、須恵器の甕が出土しました。井戸 3 からの出土遺物は乏しく、時期は確定できませんが、埋土や規模が井戸 2 と類似することから、古墳時代としました。

（４）縄文時代の遺構（第 7 図）

中期と後期の円形竪穴建物や円形の掘り込み、異形石器埋納土器埋設遺構などがあります。

建物 22 直径約 6 m前後の円～楕円形の竪穴建物です。縄文時代中期の土器が出土しました。

建物 23 直径約 6 m前後の円～楕円形の竪穴建物です。ほぼ中央部に窪みがあり、中央炉があったものと思われます。中期末葉の大量の土器が出土しました。

建物 24 直径約 3～4 mの楕円形竪穴建物と思われますが、詳細は不明です。

建物 25 直径約 4 m前後の円～楕円形の竪穴建物です。後期の土器が出土しました。

建物 26 直径 6 m前後の円～楕円形の竪穴建物です。中央部が少しくぼんで、焼土があり、その周りの床面が橙色に焼けていました。中期末葉の土器が出土しました。

建物 27 直径約 5～5.5mの楕円形の竪穴建物です。西半部が大きくくぼみ、異なる遺構の掘り込みと重複していた可能性があります。後期の土器が出土しました。

建物 28 直径 5～6 mの円～楕円形の竪穴建物です。ほぼ中央部がくぼみ、その周囲を囲むように石が置かれ、石囲い炉と考えられます。中期末葉の土器や、多様な石器類が出土しました。

建物 29 直径約 4 m前後の円～楕円形の竪穴建物と思われます。

建物 30 直径 5.5m前後の円～楕円形の竪穴建物と思われます。

異形石器埋納土器埋設遺構 異形石器 2 点を入れた深鉢形土器の底部が、正立した状態で埋められているのが見つかった遺構です。祭祀関係の遺構の可能性があります。後期と思われます。

掘り込み 11 東西 5 m、南北 3 m前後の隅丸方形の浅い掘り込みで、縄文時代中期の深鉢形土器などがまとまって出土しました。

掘り込み 12 直径 1 m前後の円形掘り込みで、縄文時代後期の土器などが出土しました。

掘り込み 13 直径 1 m前後の円形掘り込みで、縄文時代後期の土器などが出土しました。

出土遺物（第 5・6 図）

主な出土遺物には、（１）奈良～長岡京期の軒瓦（第 1 図 D・E）を含む瓦類・土器類・炉壁・漆付着土器、（２）飛鳥時代土器類、（３）古墳時代の小型仿製鏡・ガラス小玉（第 1 図 A・B）や土器類、（４）縄文時代の異形石器（第 1 図 C）などの石器類や土器類、（５）旧石器時代ナイフ形石器などがあります。ほかに、弥生時代前期の土器や蛤刃石斧、中世土器や平安時代土器類、近代の陶磁器なども出土しています。

ま と め

今回の調査では、特に、縄文時代、古墳～飛鳥時代、奈良時代末～長岡京期の時期ついて、貴重な成果が得られました。中でも、奈良時代末～長岡京期の遺構群は、当調査成果の中で、特徴的です。

①奈良時代末～長岡京期の遺構群

今回検出した奈良時代末～長岡京期の遺構群は、長岡京条坊地割の方向に合致しないとはいえ、推定される八条三坊十六町宅地の中軸に近い位置に建物 1 が配置していることや、今回検出した遺構群の北限が、七条大路南側溝推定位置の南約 15m付近にあることなど、長岡京の条坊地割を意識しているようにも見えます。

また、長岡京条坊地割に近い遺構配置をしていることや、長岡京造営官窯産の軒平瓦が長岡京期に盛行する土器より古い特徴をもつ土器群に供伴すること、長岡遷都前に、桓武天皇の有力な側近をはじめ、長岡京造営に関わる多くの人たちが宅地をおいたと考えられることなどから、長岡京遷都直前から遷都間もないころの遺構群と考えられます。

そして、条坊地割の約 1 町分を占地する宅地利用で、建物配置が非常に整っており、建物の柱間が 9 尺または 10 尺と長く、立派であること、甕据え付け穴をもつ建物の存在や、蕃塀の可能性のある施設があることなどから、普通の宅地とは考えられず、かなり高位の人物の宅地であった可能性が考えられます。当調査から、長岡京期に盛行する土器群が非常に少ないのは、長岡京条坊地割と宅地開発が進むとともに、本来の宅地班給位置に移され、当調査地に所在した施設が解体された可能性などが考えられます。

②古墳時代から飛鳥時代の遺構群

古墳時代から飛鳥時代の遺構群は、当調査範囲の東半部に掘立柱建物が多く、西半部に竪穴建物が多い傾向がみられます。西半部の竪穴建物群は、長岡京跡右京第 941 次調査南半部へ広がっているものと思われます。長岡京跡右京第 1073 次調査でも、北西部に掘立柱建物が多く、南東部に竪穴建物が多い傾向があります。

また、長岡京跡右京第 70 次調査では、飛鳥時代の竪穴建物群が検出されています。これらを総合的に大きく捉えると、竪穴建物群を取り巻くように、掘立柱建物群が広がり、飛鳥時代には、さらに標高が高い低位段丘 I に竪穴建物群が広がっているように見ることが出来ます。その範囲は、南北約 200m、東西約 250mを超えると推定でき、かなり大きな集落遺跡と考えられます。今までの調査成果を、さらに詳細に検討すれば、古墳時代から飛鳥時代にかけての伊賀寺集落遺跡の様相や変遷を、具体的に復元できる可能性が大きいと思われます。小型仿製鏡片やガラス小玉の出土は注目されます。

③縄文時代の遺構群

縄文時代の遺構群は、中期と後期の建物群が検出され、当調査区東半部には、中期末と後期の集落が重なりあっていることが明らかになりました。中期末葉の竪穴建物は、長岡京跡右京第 1073 次調査でも検出されていて、中期末葉の集落遺跡範囲が、南北約 150m、東西約 200mを超える範囲で、後期の集落遺跡と重複していると考えられます。

また、当調査や先述の右京第 1073 次調査などでは、長岡京跡右京第 943 次調査で検出された後期の焼骨埋納遺構や、同調査と長岡京跡右京第 975 次調査で出土した玉生産関係に関するものはなく、それらに関係する行為が、集落の限られた場所で行われていたことが明確になりました。石器類を作っていたことを示す石屑などが、調査区の全体に広く散布していて、集落内のいたるところで石器類（特にサヌカイト製品）が作られていたと考えられることと、大きな違いといえます。また、異形石器埋納遺構の検出は、注目されます。



C, 縄文時代 異形石器



D, 奈良時代 軒丸瓦



E, 奈良時代 軒平瓦

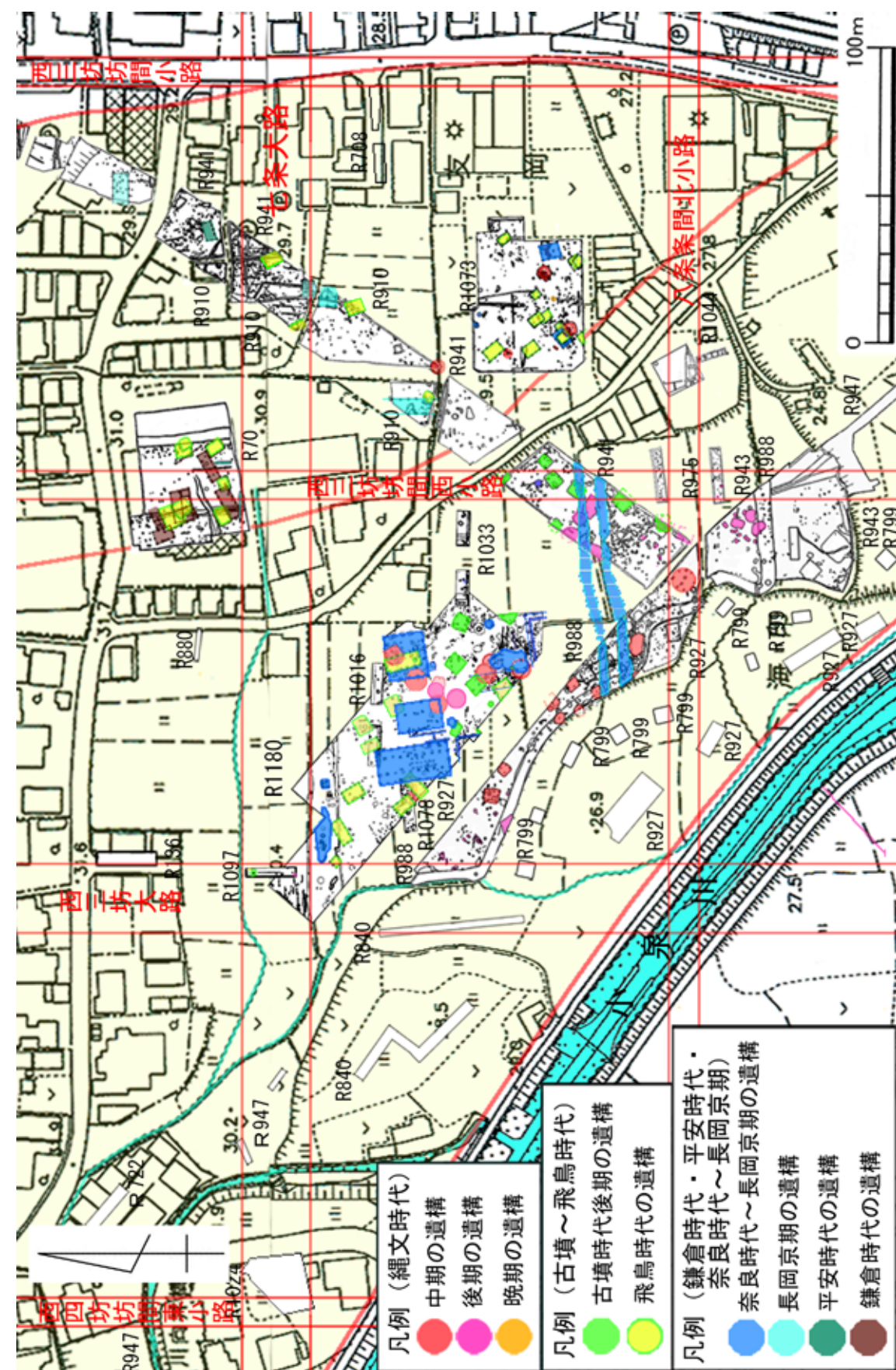
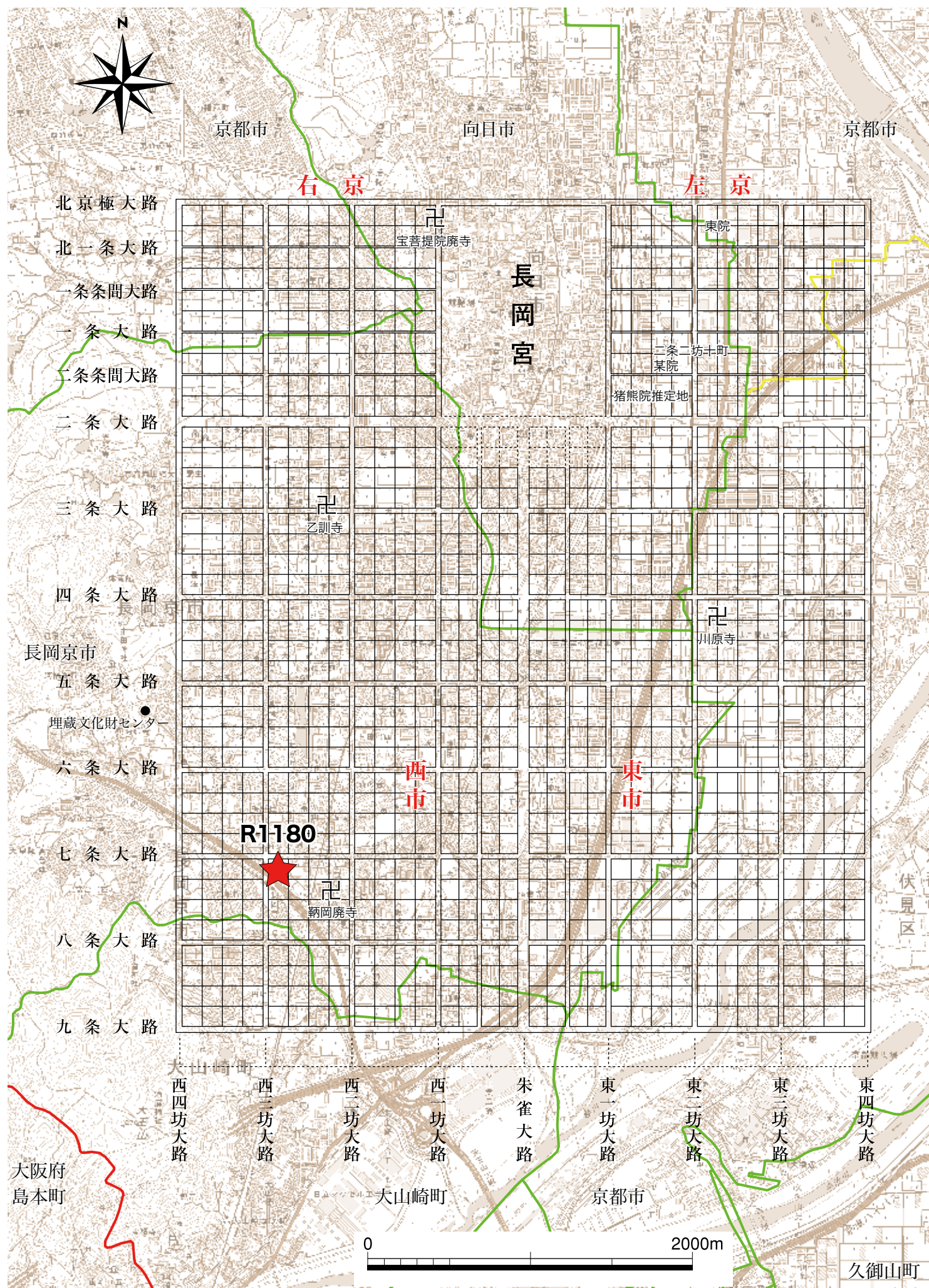


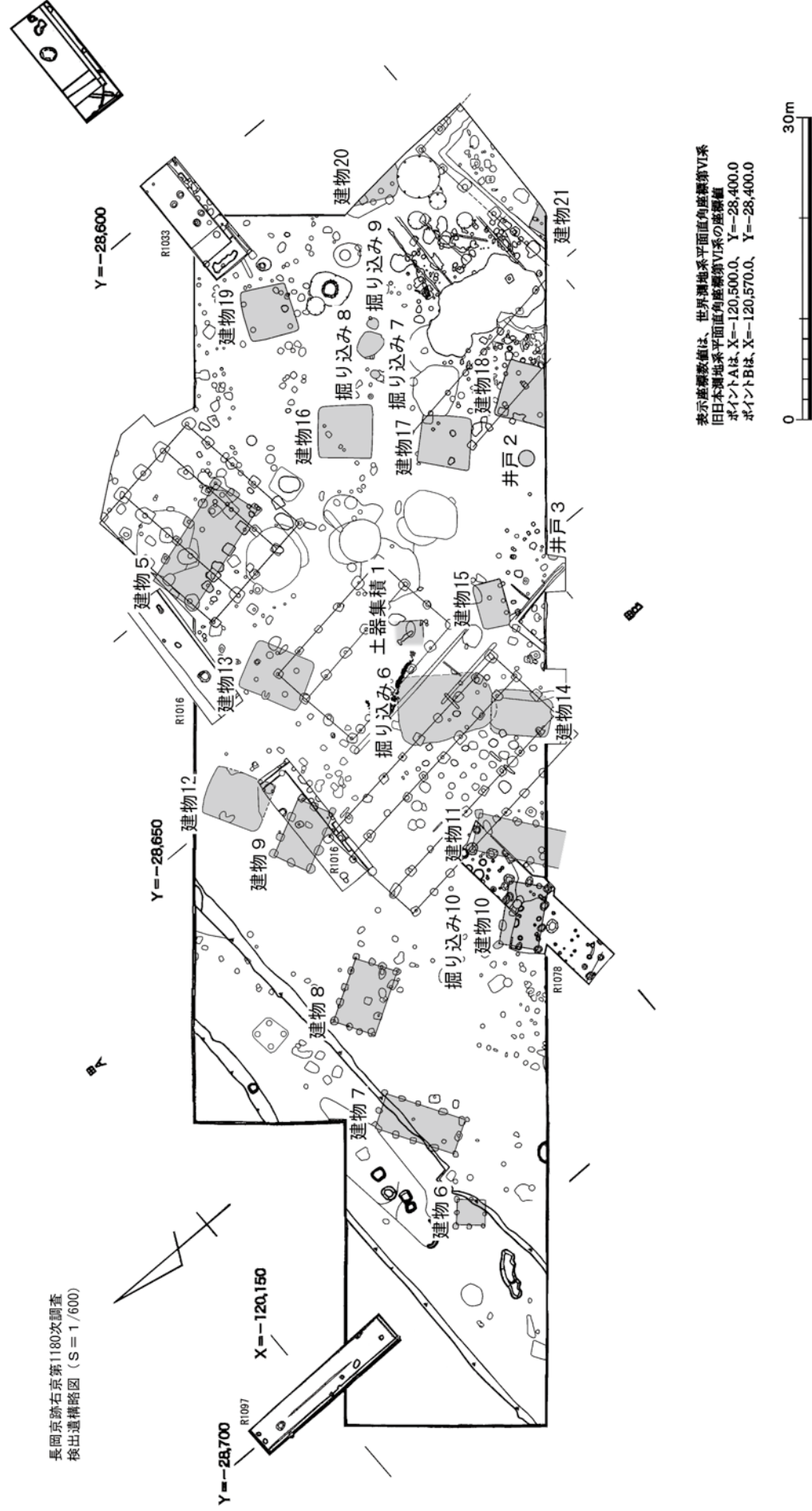
A, 古墳時代 小型仿製鏡



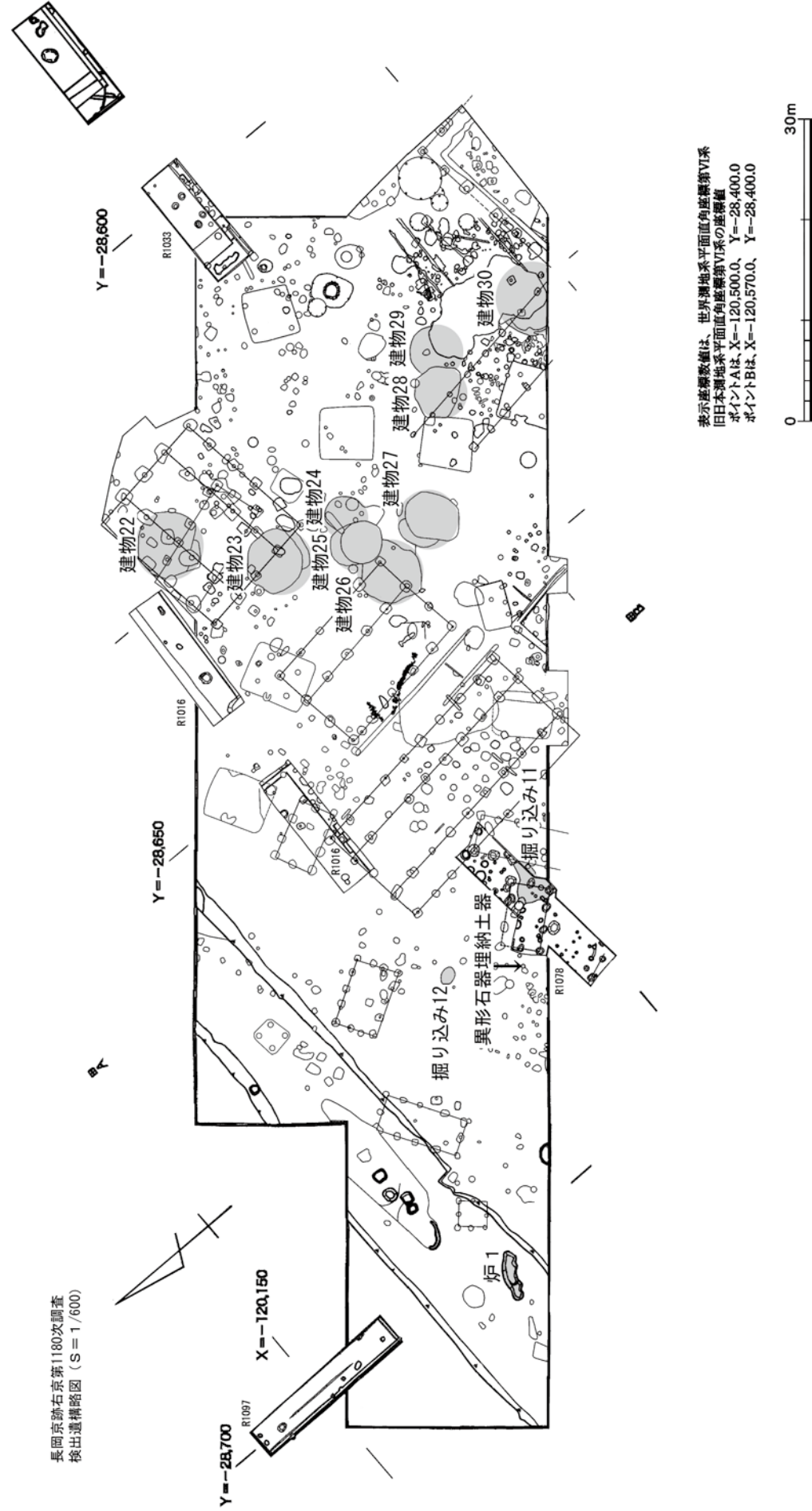
B, 古墳時代 ガラス小玉

第 1 図 出土遺物写真

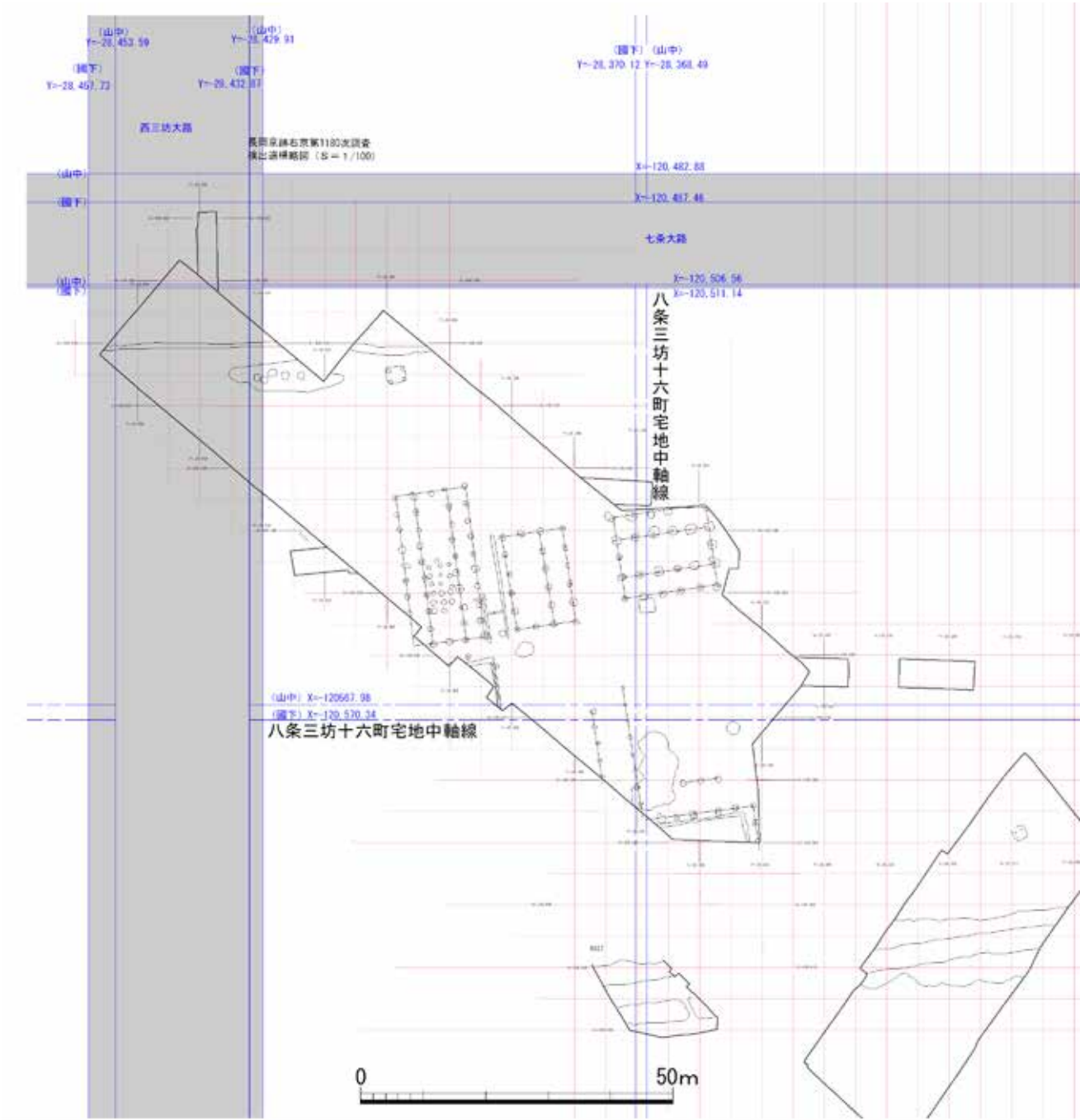




第6図 古墳～飛鳥時代の遺構 (S=1/600)



第7図 縄文時代の遺構 (S=1/600)



第8図 長岡京条坊地割計画推定線と検出遺構（S=1/1000）

西暦	年号	月	事	項
752	天平4	4	東大寺大仏開眼供養が行われる	
757	天平1	7	橘奈良麻呂の変がおこる	
758	天平2	8	淳仁天皇が大極殿において即位する(続日本紀)	
		11	淳仁天皇が乾政(太政)官院に御し、大嘗祭を行う(続日本紀)	
764	天平8	9	惠美押勝(藤原仲麻呂)の乱がおこる	
767	神護1	4	東院の玉殿あらたに成り、その殿舎に琉璃の瓦を置く(続日本紀)	
768	神護2	12	宇治宿禰の墓誌がつくられる	
770	宝龜1	10	光仁天皇が大極殿において即位する(続日本紀)	
771	宝龜2	11	光仁天皇が太政官院に御し、大嘗祭を行う(続日本紀)	
772	宝龜3	3	井上内親王が皇后を廃される(続日本紀)	
		5	他戸親王が皇太子の地位を奪われ、庶人とされる(続日本紀)	
773	宝龜4	1	山部親王(後の桓武天皇)が皇太子となる(続日本紀)	
		12	乙訓社で狼・鹿・狐が7日間にあわたり吠え鳴く	
774	宝龜5	7	陸奥国の蝦夷によって桃生城が攻撃される(続日本紀)	
		6	乙訓社に豺狼の怪異がある	
775	宝龜6	4	井上内親王・他戸親王が没する(続日本紀)	
776	宝龜7	8	乙訓郡の人羽栗翼に臣の姓が与えられる	
779	宝龜10	7	藤原百川が没する(続日本紀)	
780	宝龜11	3	陸奥国で伊治皆麻呂の乱がおこる(続日本紀)	
781	天応1	4	桓武天皇が大極殿において即位する(続日本紀)	
		6	持節征東大使藤原小黒麻呂の帰京の願いに対して勅を出す(続日本紀)	
		11	桓武天皇が太政官院に御し、大嘗祭を行う(続日本紀)	
782	延暦1	①	氷上川繼事件がおこる	
783	延暦2	10	桓武天皇が交野に行幸する(続日本紀)	
784	延暦3	5	13日、摂津職が長岡遷都の予兆として蝦蟇2万匹が移動したこと	
		5	16日、遷都のため、中納言藤原小黒麻呂らが乙訓郡長岡村の地を	
		6	10日、中納言藤原種継らを造長岡宮使に任命し、都城・宮殿の造	
		6	23日、長岡京の宅を造営するために、公卿・内親王らに諸国の正	
		6	28日、新京の宮城に入るため接収される百姓の私宅の代償として、	
		11	11日、桓武天皇が長岡宮に移幸する(長岡京遷都)	

西暦	年号	月	事	項
		11	20日、長岡遷都のため、賀茂上下二社および松尾・乙訓二神に叙位を行う	
		11	24日、高野新笠と皇后藤原乙牟漏が、平城宮より長岡宮に移る	
		11	28日、使者を派遣して、賀茂上下二社及び松尾・乙訓二社を修理させる	
785	延暦4	1	大極殿で元旦朝賀、内裏で節日饗宴を行う	
		1	造宮資材運搬のため、摂津国神下・梓江・鯉牛野を掘開し、淀川を三國川と結ぶ	
		7	長岡宮の造営のため、諸国の百姓31万4000人を和雇する	
		8	長岡宮の太政官院の垣を築いた大桑公宅守に従五位下を授ける	
		9	23日、藤原種継が射殺される	
		9	23日、藤原種継を射殺した賊のうち多治比浜人を大枝山にて処刑する	
		9	24日、大伴継人・竹良ら党与數十人を断罪し、藤原種継を射殺した伯耆俘麻呂・社鹿木積麻呂を山崎橋の南の河のはとりで斬る	
		9	28日、皇太子早良親王が内裏より東宮へ帰り、即日乙訓寺に幽閉される。その十余日後、親王は淡路に移送中に高瀬橋のはとりで死去する	
		10	使者を山科・田原・後佐保の各山陵に遣わして、皇太子早良親王の廃立を報告する	
		11	10日、長岡京の南郊の交野に天神をまつる(続日本紀)	
		11	25日、安殿親王(のちの平城天皇)を皇太子とする	
786	延暦5	5	左右京および東西市の人々に物を賜う	
		7	太政官院が完成し、百官初めて朝庭につく	
		9	宅志濃王を山背国班田長官に、多治比継兄を次官に任命する	
		10	上毛野公我人を西市正に任命する	
787	延暦6	2	桓武天皇の皇子である岡成なる人物が長岡朝臣の姓を賜る(続日本紀)	
		10	水陸の便によって長岡に遷都した旨の詔を出す	
		11	長岡京の南郊の交野に天神をまつる(続日本紀)	
788	延暦7	5	夫人藤原旅子が死去する(続日本紀)	
		9	水陸の便によって都を建つ旨の詔を出す	
		11	長岡京右京6条3坊にある家地1所を、石川朝臣吉備人が御山造少阿麻呂に売与する	
		12	征東大使紀古佐美が征夷のため出発する(続日本紀)	
789	延暦8	2	西宮より東宮へ遷御する	
		6	征東將軍が北上川畔において大敗した由を奏上し、桓武天皇がその戦略を叱責する	

表 1 長岡遷都前後の年表